

留学速報

ニュージャージー医科大学 —アメリカで独立の一步を踏み出すために—

佐渡島 純 一*

渡米して14年になる。最初は3年のつもりでやってきたので、妻の実家からそろえてもらった家具など、ほとんど使うまもなく福岡の倉庫に眠らせていたが、それも残念ながら最近処分するに至った。アメリカならではの大学の倒産や、突然の研究室の閉鎖、それに伴う数多くのジョブ・インタビューなども経験し、いつのまにかアメリカの生活にどっぷりと浸かってしまった。幸い自分のやりたい仕事を存分にできる職に就くことができたので、苦勞のし甲斐があったとは言えるが、アメリカのシステムを知らないばかりに、時間的にも金銭的にも多くの無駄を経験したような気がする。ここに自分の失敗や体験の一部を記して、後輩への助言としたい。

独立について

日本からの留学生で、最初から独立を目指して渡米する者の数は多くはないだろう。しかし、留学後日本に戻って大学の中で研究を続ける、という漠然としたプランがあるのなら、かなりの面で自分の力で道を切り開くことができるアメリカでも研究を続けることを、最初からオプションに入れておくことは無駄ではない。私の場合、そういうオプションがあることに気付くまで随分時間がかかった。日本では、研究の素晴らしさを教えられ博士号までいただいたが、その先に何かあるのかを余り教わらなかったと思うし、自分もそれに備えて行動を起こすという発想はなかった。選択肢を知り、具体的な目標を持って自ら行動するというビジネスライクな発想が、アメリカの医学研

究には重要である。独立するというオプションを認識して一たん走り出せば、若い研究者の独立を助けるためのいろいろなメカニズムが存在するため、外国人であるというデメリットはほとんど存在しないことを強調しておきたい。

独立することの意義は何だろうか？それは、数年後の自分の姿を他人に惑わされずに自分自身で決定できることにあると思う。独立の過程で、アルゲニー大学の倒産やペンシルベニア大学の経済的破綻に遭遇し、自分や家族の将来を一時期他人の意思にゆだねざるを得なかった私にとっては、この思いは非常に強い。ラスト・オーサーの論文を出版することの快感などというまでもない。私は、独立するということは人を押しのけることではなく、人々のコンセンサスをうることだと考える。早い時期にたまたま運良く独立することができても、長くは続かない。重要なのは、毎日の仕事全てが自分の将来のための肥やしになるとポジティブに考える環境に身を置くことだと思う。自分の可能性を理解してくれる環境で目標をオープンにし、周囲からの協力を得ることが大切だと思う。研究資金や昇進は後からついてくるものと考えべきである。アメリカは個人主義の国とされているが、若い研究者にとってはチームプレーに徹することは重要である。デパートメントにとって重要な人間であると認められ、共同研究の一員となることは、研究費や昇進を得る上で必須である。研究課題などで直接の上司と利害関係が絡む場合は、十分に話し合うか、新しい職場に移り、自分の研究を理解してもらえる場所で研究に打ち込むべきである。

*ニュージャージー医科大学細胞生物分子医学部門、
心臓血管研究所

グラントについて

私にとってグラントの申請は大きな壁であった。NIHのグラントは予算の規模とその審査基準の厳しさから、研究者の独立のシンボルと言える。96年に申請を始めたが、数回続けて落選した。乏しい英語力を駆使し、実験をしながらやっとの思いで作上げたシングルスペースで25ページものプロポーザルがいつも簡単に落ちてしまうので、世の中が地獄のように見えた。自分には数多くの論文があるのにと、なぜ落選するのか解らなかつた。この問題にはずいぶん頭を悩ませたが、ようやく00年から申請がスムーズに受理されるようになった。同時にNIHで他人のグラントを審査する立場になって審査の公正さを目の当たりにし、初めて以前のグラントの弱さを理解するに至った。何につけてもまず身をもって経験してから、という何とも効率の悪い生き方をしていると思う。

審査に関して何よりも感じるのは、グラントが非常に多角的に評価されることである。現在の採択率が20%前後なので、学会の常連に混じって受理されるためには全ての項目で魅力的であることが必要である。仮説が斬新であり、研究項目がユニークであること、プロポーザルが現実的であることは勿論、所属するデパートメントを始め共同研究者が、申請者にとっていかにサポートティブであるかを示すことも重要である。論文や学会発表、論文査読、様々な委員会における地道な貢献も評価される。マクロな視点を持って一つ一つ問題を解決していくためには、早い時点でドラフトを作ることは必須である。最初は気が付かなかつたことだが、むしろ自分の専門分野以外の人に読んでもらって解りにくい点を指摘してもらうことは、現実的で解りやすいプロポーザルを作る上で大変有用だと考えている。プロポーザルの作り方を小学校から教えているアメリカで、私は大変遅れてスタートラインに立ったようなものだが、痛い失敗を通して教訓を得ることができたことだけでも幸運に思うべきだと考えている。

子供たちと学校教育について

日本からの留学生で、優秀な仕事を残しながら子供の教育のために帰国を決定するケースを数多く見うける。私も渡米するまでは、アメリカの義務教育はお絵かきや塗り絵ばかりでレベルが低いと聞いていたが、このイメージは脆くも崩れ去った。私の子供たちが通う公立の学校では、結果よりも物を考える過程を大切する授業だけでなく、膨大な資料の中から重要な情報を取り出す作業、パワーポイントを使ったプレゼンテーションの練習など、かなり実践的な教育が行われているように見受けられる。高校生の娘の生物の教科書は、百科事典ほどの分厚い立派なもので、授業の内容が暗記でないことは一見してわかる。子供たちがアメリカで教育を受けることができたことを今では幸運に思っている。ただし公立高校の授業の厳しさは想像を越えており、競争社会であることは予想外であった。この他に日本語の勉強のためにも努力を強いらねばならず、子供たちには随分と苦勞をかけていると思う。これらの苦勞が彼等の将来に多くの選択肢を与えてくれることを願っている。

おわりに

インターネットの発達で日本の動向がリアルタイムでわかるようになった現在、アメリカの生活で日本を遠くに感ずることもはやはない。こういった時代に、もっと多くの優秀な日本の研究者がアメリカで活躍していてもおかしくないのではないか。日本の研究者にとって技術的に学ぶものは多くはないかもしれないが、アメリカにおけるオプションの多様さと可能性の深さは魅力的なはずである。ずいぶん奥手な私ですら、明日は何があるかわからないと考える習慣がついたと同時に、5年、10年先の違った自分を夢見ている。随分と大きなことを書いてしまったが、日本の心臓血管病研究者の世界規模での活躍を切に祈る者の意見としてお許し願いたい。